

夏休みには、日本や世界の古典を2～3冊じっくり読み、
著者との時空を超えた対話をしよう

開倫塾

塾長 林明夫

Q: 塾長は、開倫塾ニュース6月号で、「令和」の時代には万葉集をはじめ、日本や世界の古典をじっくり読むことをお勧めになりました。「令和」の出典となった万葉集のほかに、どんな本を読んだらよいのでしょうか。著者名と作品名を具体的に教えてください。

A: (1)わかりました。それでは、小学校の高学年から中学・高校生、社会人が読んで参考になる「古典」を何冊か紹介させていただきます。

(2)ご紹介する前に、「古典」とはどのような本かを少し考えてみましょう。「古典とは、人々によって長い間読み継がれてきた本」と私は考えます。「どのような人々によってか」、「どのくらい長くか」は本によって異なりますので、皆様が自由にお考えください。

(3)私が第1にお勧めするのは、内村鑑三著「後世への最大遺物・デンマルク国の話」岩波文庫、岩波書店刊です。人は自分が死んだ後、後世にどのような物を遺(のこ)すことができるのかという本です。お金、仕事、作品、教育、生き方など後世に遺せるものは何かを、読者ととも真正面から考えています。例えば、デンマークのある人は何を後世に遺したいのかを語ったのが、「デンマルク国の話」です。内村鑑三著「代表的日本人」岩波文庫、岩波書店刊は、後世に多くの物を遺した代表的日本人として、新日本の創設者・西郷隆盛、封建領主・上杉鷹山、農民聖者・二宮尊徳、村の先生・中江藤樹、仏僧・日蓮上人を紹介しています。自分自身はどう生きたかは、内村鑑三著「余(よ)はいかにしてキリスト信徒となりしか」岩波文庫、岩波書店刊で述べています。日本の古典として、内村鑑三の3部作をお勧めします。

Q: まずは内村鑑三ですか。お勧めの第2は何ですか。

A: (1)第2にお勧めするのは、福沢諭吉の自叙伝である福沢諭吉著「福翁自伝」岩波文庫、岩波書店刊です。「福翁自伝」を半分ぐらい読み終えたら、同時に福沢諭吉著「学問のすすめ」岩波文庫、岩波書店刊を1章ずつ読み進めると、福沢諭吉の考えがよくわかります。

(2)この2冊を最後まで読み終えたら、福沢諭吉著「文明論之概略」岩波文庫、岩波書店刊に挑戦しましょう。

(3)この3冊は、わかりやすい現代語訳が何冊か出ています。岩波文庫で歯が立たなかつたら、まず現代語訳を1章ずつ読み、その後に岩波文庫をゆっくり読むとよいでしょう。

Q: お勧めの第3は何ですか。

A: (1) 第3にお勧めするのは、「四書」といわれる中国の古典です。「四書」とは、「論語」「孟子」「大学」「中庸」の4つです。

(2) まず孔子の教えを弟子たちが499章にまとめたといわれる「論語」を読み、次に孔子の後継者といわれる孟子の考えをまとめた「孟子」を読み、最後に「大学」と「中庸」にお進みになるとよいと思います。

(3) この4つの中国の古典はあまりに有名なため、内容を紹介する本がたくさん出ています。最初から漢文に挑戦できる人は、頑張って岩波文庫版などにチャレンジを。ちょっと難しそうだなと思う人はあまり無理をせずに、書き下し文やわかりやすい口語訳だけ読んでみることをお勧めします。書き下し文を何回か音読し、慣れてきたら返り点などのついている漢文に挑戦するとよいでしょう。

* 一番のお勧めは、足利学校のおみやげである、須永美知夫著「論語抄」史跡足利学校刊を声を出して読むことです。開倫塾の各校舎に1～2冊置いてありますので、手に取ってご覧ください。

* 「四書」、つまり「論語」「孟子」「大学」「中庸」の全文の詳しい内容を知るのに最もよいテキストは、明治書院刊の「新釈漢文体系」です。少し大きめの図書館には大概ありますので、図書館でお読みください。お小遣いがたまったら自分で買って、一生かけて読んでくださいね。

Q: 最後に一言どうぞ。

A: (1) 今回は、古典として内村鑑三先生の3冊、福沢諭吉先生の3冊、中国の古典「四書」と合計10冊の本をご紹介しました。

(2) 文学や音楽、日本舞踊やバレエ、絵画や彫刻など様々な分野にも、「古典」とよばれる作品があります。日本にも世界にもあります。

(3) 興味や関心のある分野についてよく勉強して、何が「古典」であるかを自分の力で見つけ出しましょう。そして、これぞという作品に出会うことができたなら、「著者との時空を超えた対話」をするつもりで、素直な気持ち、真剣な態度で作品と向かい合ってみましょう。必ず得るものがあります。夏までに1冊、夏休みに1冊、秋にもう1冊、冬にもう1冊と、季節・季節で1冊ずつこれぞという「古典」と親しむことができたなら、豊かな人生といえます。古典とはそういうものです。

2019年4月2日(火)記